

青年心理学研究の課題と展望

久 世 敏 雄

はしがき

青年心理学の課題

かつて、青年心理学の目的は、青年の意識と行動を心理学的に分析することである、といわれていた。青年期では、たしかに、心身の変化は著しく、人格の構造は再体制化されていく。したがって、青年心理学の課題は、この変化の性質およびそれが人格形成に及ぼす影響を明らかにすることである、ということもできる。つまり、青年の思春期的、知的変化およびそれらが人格——動機づけ、性差、信念体系、態度、自我などを含むパーソナリティ発達——に及ぼす影響を明らかにすることである。

青年心理の領域でなされる研究に即していえば、つぎのようになる。

- ① 青年期の心理、社会的発達の主要な問題と直接にかかわる研究を進めること、例えば、愛着、自律性 autonomy、親密性 intimacy、達成、性役割、同一性など。
 - ② 青年の行動と発達に及ぼす有機的組織体 organizations の影響に関する研究を進めること、例えば、家族、仲間、学校などの青年の行動と発達に及ぼす基礎的ならびに応用的研究を進めること。
 - ③ さまざまな“健康”教育に関する研究を進めること。
 - ④ とくに青年後期の女子青年に視点をあてるとき、仕事と家族の役割の社会化に関する基礎的な研究を進めること。
- などである。

青年心理研究の領域を示せば以上のとおりであるが、ここで再び繰り返すと、青年心理学の課題は、身体的、性的ならびに知的・認知的発達の変化する時期であるから、この変化が青年の生活——家族、仲間、学校生活とどのように相互作用し、その経験が人格形成の基盤として、どのように作用するかを明らかにすることである。

こうした視点から、以下、青年心理研究の現状を概括することから始めよう。

1. 思春期的変化——身体的・性的変化

急激な身体的変化、性的変化を伴う思春期的変化は、青年の心理・社会的発達にさまざまな効果をもたらす、と指摘されてきた。ホール (Hall, S. 1904) は青年期を疾風怒濤の時期と捉え、不安と動揺にみちた青年像を描いたのであるが、かれは、こうした様相を呈する要因として思春期的変化を仮定している。精神分析の立場からは、エディパス願望の復活が思春期の到来と関連づけられており、青年期の特徴とみられた反抗と粗野は、青年の自然な振舞とみなされてきた (Freud, A. 1968)。この青年理解は、ビューラー, Ch. やトウムリルツ, O. などの1920年代のドイツの青年心理学者と共通したみかたといえる。また、思春期的変化は、一部、同一性危機とかかわることが指摘されている。異なった身体は自己像 self image あるいは自己概念の変化をもたらすと考えられている。

このように青年期の古典的解釈において主流となっていた思春期的変化を直接に検討した研究は、バークレー、オークランド研究などの僅かな例外を除いて、過去において殆ど見当たらないのはむしろ奇妙な感じがえる。

身体的変化の自己への効果はどのようなものであるか、他者——両親や仲間、社会的刺激としての急激に変化する身体への反応に異なった行動をし始めるのであるが、青年への効果はどのようなものであるか、そして、他者の反応に媒介されるパーソナリティ、社会的行動や発達への効果はどのようなものであるか、について、われわれは殆ど理解していなかったのである。

生物学的変化と心理・社会的発達の相互性

しかし、初期青年期に関心がもたれ始めた1970年代の後半から、この領域への研究の関心と考察は深まっている。1980年代に入ると、思春期の生物学的変化と心理的適応——心理・社会的変化の相互性を強調する動きがみられる (Petersen, A. C. & Taylor, B. 1980)。こ

Lerner, (1985) は、青年は自己の発達の producer として行動すると主張する。第1は、刺激としての青年として、第2は、認知構造と情緒的反応の様相に関する処理者 processor としての能力によって、第3は、主体、形成者、選択者として自己の発達をつくり出す、と述べている。思春期の生物、社会・心理的变化が相互に規定し合うことの多いことは十分考えられるところであり、心理的発達と社会的変化が青年の生物学的機能に影響することも考えられている。Petersen (1987) も、生物学的、心理・社会的変化は相互依存的であり、ダイナミックに相互作用する、というモデルを提出している。思春期は、こうした研究に好適な自然の場を提供している。初期青年期を対象とした生物-心理・社会的相互作用の性質と範囲に関するモデルとその検証が始められている。

こうした研究の動向もさることながら、思春期的変化を独立変数とした研究が、ここ10年来始められている。先駆的研究は、Steinberg & Hill (1978) にみられるが、Steinberg (1981) では、青年期男子の思春期的状態 pubertal status の変化が、構造化された家族相互作用課題での家族行動の変化と有意に関連していることを見出している。この研究で身体的成熟の発達は、半年隔たる異なった時期に家庭訪問をする2人の観察者によって評定されている。観察者は、青年の顔、身体の釣合、身体の協応性の3側面について評定し、身体的状態を査定する。この評定基準は、Tanner (1962) と Stolz and Stolz (1951) で報告された第2次性徴の発達に基づいて構成されている。男子青年の身体的成熟の状態は、前思春期、思春期初期、思春期の頂点、思春期後期および後思春期に分けられている。評定の差異は、評定者間の話し合いで決められている。尺度の信頼性は、.82である。なお、観察者による身体的状態の分類は、家族との相互作用の情報を知らない時点で得たものである。

言を中断しあい、説明が少なくなっている)、息子の母に対する自己主張と決定が増加すること、および父の支配が増加し息子は父に服従することが報告されている。青年男子の両親との関係の変容は、かれらの身体的特徴の変化と関連することを示している。思春期の成熟は、社会的、心理的効果をもたらしている。

また Hill, et. al. (1985b) は、7 年生の女子家族を対象に初経開始の状態が親子関係にどのような効果をもつかを検討する。この研究では、Steinberg らの研究とくらべ、男子のかわりに女子、思春期的状態の観察でなく、初潮状態の自己ならびに親の報告、さらに構造化された実験的課題のかわりに家族の process と結果を質問紙法によって得ている。

結果をみると、少女の初潮がなみ（普通）の時点ないしその近くでみられる家族では、親子関係の変化は一時的動揺と考えられるが、初潮が早すぎる少女の家族では、その効果は持続するのではないかと推測されている。

2. 認知的變化

自己の基盤としての認知的発達には、ピアジェによる形式操作の時期として理解されている。青年は具体的状況から解放され、さまざまな事象を論理的、一般的、抽象的に考えることができるようになる。現実とはとりうる1つの可能性として理解され、理想の視点が日常生活

に導入されてくる。このことは、青年の時間的展望も増大し、分化してくることを表している。

自己と社会的世界の認知は、こうした認知的発達に規定されると同時に、他者と社会の特性によっても規定される。この社会的認知の発達は、他者および環境的世界の特性を理解する過程として位置づけられるが、これは同時に、青年が自己と他者、自己と社会についての認識と理解を深める過程として把握することもできる。

社会的視点取得能力

家族、仲間あるいは教師がどのように考え、どのような行動をとろうとするか、自分に何を期待しているかを理解する能力は、家族との生活、友人関係や学校での生活において極めて重要である。Selman (1976) は、他者の役割をどのようにとり入れることができるかの能力を社会的視点取得能力と呼び、社会的視点のとり方の発達のプロセスを描いている。青年期では、自他の視点を協応させ、自分と相手のやりとりを別の、第3者の視点からとらえることができる、といわれている。

こうした能力を基盤として、青年は他者とのコミュニケーション技術と対人交渉方略のレパートリーの拡がりをしめす。このコンピテンスは、重要な他者と関係し、さまざまな問題を処理する方法にみられる。このいわば、関係的な能力は、自己開示として、他者との差異を探究し、葛藤を体験し、解決する能力である。対人交渉技能の研究は始められたところであるが、Selman ら (1983, 1984) は、対人的 negotiation 方略の発達モデルを提出している。今後の研究の発展が期待される領域である。

家族関係の変化

最近、青年の社会、認知的変化とこの時期に変化する家族関係を結びつける研究が始まっている。Smetana (1988b, 1989) によれば、青年の認知的変化によって以前は両親の監督下にあると考えられていた領域が、自分自身の管轄のもとにあると考えるようになる。両親はこれに対して、これらの領域の多くは親の権威のもとにあると見続けている、と指摘する。彼女 (1988b) は、この潜在的な食違が青年期の葛藤を説明するのではないかという。両親と5年生から12年生の子どもの面接に基づいて、年長の子どものは、前青年期の子どものに比べて家庭で生ずる問題——例えば部屋をきれいにするとか、服装の問題など——を慣習 convention の事柄というより、個人の選択ないし好みとみていることを明らかにする。青年は身の周りの多くの問題を自分の管轄下にあるとみているが、両親とくに母親は、ある程度、かれらの権利

のもとにある規則に属する問題と理解する。事柄の定義ないし概念上のこの差異が親子間の葛藤を増加する。しかし、Smetana (1988a) の結果は、親の権威についての親子の概念は初期青年期に最大に分離する、という予測と一致していない。それらは、青年期中ずっと分離している。青年中期あるいは後期では、親子間の葛藤は減少するがそれは、親が実際子どもに徐々に譲歩するのか、子どもの能力が増加する——少なくとも両親の視点を理解する能力が増加するかの、何れかに帰因させられる。

親子の関係は、また、児童期から青年期にかけての子どもの変化する自己概念に影響されるかもしれない。Demon & Hart (1982) によれば、子どもは成熟するにしたがって、自己概念は身体的、活動的側面への信頼から、自己の社会的、心理的側面への信頼にむかって変化する。初期青年期の自己概念は、自己が他者にいかにもみられているか、他者の是認を得ることに関心がむけられている。自己を社会的ネットワークに統合する関心である。多くの青年では、この他者の見方への依存は、青年後期に減少する。現象的に不一致な特徴を整合できる自己の抽象的、統合的概念が形成されるからである。青年の自己概念の親子関係への発達的变化の意味づけは、今後の課題となっている。

社会認知的発達の徴標は、親子関係の変化と関連する。Smetana (1988a) の見解と同様に、Powers, et. al. (1989) は、家族関係の再調整と親の権威、家族の役割と規則についての新しいみかたが、青年と家族の継続した成長に必要である、と述べている。親子関係、家族関係の認知および行動の相互作用への思春期的、社会認知的発達の効果に関する縦断的検討が要請されている。

3. 性役割

ここ20年来、私どもの周りの女子青年は、卒業論文のテーマとして毎年のように性役割、性(役割)同一性の問題をとりあげている。卒業を目前にして、自分はどの職業を選択したらよいのか、自分の選ぶ仕事の役割と家庭(結婚生活)の役割をどのように考えたらよいのか、どのように調整したらよいのか、という問題意識である。青年後期の女子青年は、性別役割分業意識の時代的な変化に伴って、仕事と家庭の役割について真剣に考え、深刻な選択を迫られている。性役割と性(役割)同一性の問題は、女子青年にとってこの時期に解決すべき発達課題であることを示している。

子どもは、男子あるいは女子としての社会的期待を学び、基礎的な性同一性を発達させ、5歳ごろまでに性に型づけられた好みと行動を身につけている。経験的デー

タによれば、就学前の子どもはしばしば性役割に一致する基準を採用する。したがって、その後の年齢では性に型づけられる発達、自己の信念と態度の変化として理解する必要がある。

子どもは、初期青年期の身体的、社会的変化を体験するにしたがって、かれらは、男性あるいは女性としての役割について新しく定義することを求められる。性役割の発達は、自己の性に適した行動、態度、興味、情緒的反応、動機を獲得する過程である。初期青年期は、若い人びとが男性あるいは女性としての、成人の身体的、性的属性を発達させる時期であり、家族、仲間、社会的制度は、社会の慣習と成人の役割に一致するように期待する。身体的諸変化は、重要な他者の役割期待の変化を生じさせている。ここでは Huston & Alvarez (1990) にしたがって、青年期の性役割の発達の变化を述べる二、三の理論について、とくに初期青年期に的を絞って検討しておこう。

Block は、自我発達に基づく性役割段階の系列について述べている。彼女によれば、児童中期は性役割が2つに分岐する時期である。子どもは、男子あるいは女子としての性役割の社会的定義に同調することに関心を持ち、他の性と関連するパーソナリティの特質を抑えることを学ぶ時期である。とくに女子は、主体的、個人的、攻撃的傾向を抑え、男子は、共同的、表出的、やさしさ傾向を抑える。外的に課された役割への同調の時期に続いて、役割価値が内在化する良心の時期がくる。初期青年期の多くの子どもは、同調から良心の時期への過渡期と考えられる。このモデルでは、性に型づけられる属性は、しだいに内在化すると予測される。

Kohlberg は、性型化 sex-typing は認知的発達に基づくと述べている。かれは前操作から具体的操作機能への移行期は、児童中期の子どもの性についての考えが柔軟になる時期とする。子どもは、性はみかけや行動の表面的変化によって変わらない、性恒常性を理解するからであり、また、具体的操作思考の柔軟性を示すからである。社会的に規制される性役割の知識と受容は、年齢とともに増加するが、児童中期の子どもは少なくとも、性役割について柔軟性を増すと考えられている。この理論を青年期に拡張して考えると、抽象の新しい水準が人の理解に適用されるにしたがって、性役割の定義において柔軟性を増す時期ととらえることができるであろう。

性増強 gender intensification

他方、児童期から青年期の過渡期についてしばしば述べられる仮説は、性に関連した発達は初期青年期に増強ないし強化される、というものである。

精神分析の理論では、児童期の潜伏期に続いてエディパス葛藤が復活する、生殖器段階が提出される。この段階をうまく解決することが成人の性役割と性の好みを生ずるとされている。

また、他の理論家によると、性に適した行動に対する社会的圧力は、児童中期では比較的穏やかであり、女子ではとくにあてはまる。しかし、思春期の到来とともに性役割の伝統的意識を固執させる心理・社会的力が、増大する、といわれる。例えば Douvan & Adelson (1966) は、児童中期の女子はおてんば娘のように行動する自由があるが、青年期に彼女らは、成人女性の基準を採用するだけでなく、興味と要求がせばめられる女性性 femininity を示すことを指摘する。女性の非競争への要請と男子への追従が内在化されるにしたがって、少女の学校および生涯の経歴動機は、初期青年期で低下する。

性増強仮説の最近の洗練された説明は、Hill & Lynch (1983) によってなされている。かれらは、性差が青年期に増加するか否かをパーソナリティ（例えば自己尊重）や友情の型などを調べて検討している。そして、性役割はこの時期に分化し初めている若干の証拠があると結論づけている。初期青年期における性増強は、思春期の身体的変化によって促進されるが、Hill & Lynch は社会的変数が主要な要因であると述べている。すなわち、ホルモンの変化を伴う身体的変化自体は、成人と仲間の性期待とかかわる行動を導くであろうが、社会化主体の変化する期待が、青年期にいたる過渡期では広範な効果をもつという（Lynch, 1991）。

初期青年期における発達の变化のより所として、身体的——ホルモンの変化、社会的圧力、個人の自我と認知発達、さらに時代的、歴史的変化などを指摘することができる。これらのすべては、青年期の性役割発達に効果をもつが、身体的、心理的諸変化は、社会的文脈の中で生じている。家族、仲間、学校、そしてテレビなどの影響を受けながら、青年、とくに後期女子青年は、性役割、性同一性の問題と直面している。

対人的同一性

性役割、性（役割）同一性の問題は、同一性ととくに対人的同一性 interpersonal identity の形成と密接にかかわっている。対人的同一性を理解するには、対人関係（友情、デート関係など）を掘り下げ、対人関係に関する同一性形成の領域を検討することが望まれる。この視点から問題を考える上で、示唆に富む Grotevant たちの一連の研究をみておこう。

Grotevant, Thorbecke & Meyer (1982a) では、

同一性を把握する新しい方法を洗練している。Marcia の identity status interview を改訂し、3つの対人的領域——友情、デートと性役割に適用し拡張している。さらに identity は各領域の探求 exploration、コミットメント commitment および同一性の状態 identity status から検討する。つまり、Marcia (1966) では、職業、宗教、政治などの領域での同一性形成を全体としての identity status から査定するが、この面接に対人的領域を附加し、identity の査定方法を工夫している。Grotevant らは、この方法によって対人的同一性形成の検討をする。なおかれらの被験者は、以下すべて高校生である。

Grotevant & Thorbecke (1982b) は、職業的同一性形成の styles における性差を検討する。職業的同一性の発達性差を検討するために、男子41名、女子42名は、identity status を査定する面接を受け（同一性の測定）、さらに職業的同一性、社会的望ましさ、男性性／女性性および達成動機を測定するための質問紙を実施された。結果をみると、2つの同一性測定では、職業的同一性達成の性差は殆どみられないが、同一性測定と、男性性／女性性および達成動機との関連の仕方に、性差がみられている。男子では、職業的同一性と男性性および成就志向は関連し、同一性面接での職業的探求と女性性、職業的コミットメントと男性性および成就志向と関連している。女子では、職業的同一性は、男性性および勤勉 hard work 志向と関連するが、競争志向とは負の関連がある。

なお、興味深いことに、道具的であり表出的である志向性——両性具有青年 androgynous adolescents は、同一性形成の過程でもっとも進んでいる、とする結果が得られている。

Thorbecke & Grotevant (1982c) では、対人的同一性形成における性差を検討する。関連する諸変数は前の報告と同様である。結果をみると、女子では、友情の領域では同一性形成が男子よりなされているが、デートの領域では性差はなかった。対人的同一性の探求は、男女ともに心理的女性性の表出的属性と正の相関を示す。対人的同一性の評定と成就志向の関連は、男子で正の、女子で負の相関がある。友情のコミットメントは、男子の競争志向と正の、女子の競争志向と負の相関が示される。これらの結果は、Gilligan の理論的枠組——男子では分離と autonomy を通しての同一性の達成、女子では結合性と関係 relationships を通しての達成——にしたがって、討論されている。

Cooper & Grotevant (1987) は、対人的同一性——友情とデート関係の形成におよぼす家族経験の役割を検討

している。対人的同一性と家族経験の結びつきは、男子と女子では異なっている。友情およびデート同一性とかかわる家族の特徴的な相互作用をみると、女子では、友情同一性探求は家族相互作用における分離と関連するが、男子では、結合性と結びついている。さらに、女子は男子にくらべ、デート同一性でよりコミットしていることが明らかにされている。

なお、Werrback, Grotevant & Cooper (1992) では、性役割概念の発達と家族相互作用の関係を検討している。自我同一性面接における性役割の反応は、Block の性役割概念の発達段階が反映される。結果をみると、良心的な性役割概念をもつ女子青年は、家族とともに過ごす時間が少なく、夫婦間のコミュニケーションでは妻が夫にあまり妥協しない、間接的な示唆が少ない、いわば伝統的女性としてのコミュニケーションの少ないことが示されている。父と娘の間のコミュニケーション変数と性役割得点には、関係はみられない。これに対して、良心的な性役割概念をもつ男子青年は、母と息子の間に結合性があり、友達とあまり一緒に過ごさない。父と息子の関係は、父から息子への結合性は少ないことが示されている。

以上において、Grotevant たちの研究を手がかりに、高校生の性役割、性（役割）同一性、対人的同一性形成の過程を一瞥してきた。大枠のところで高校生段階では、gender intensification hypothesis を支持する結果がみられるが、対人的同一性形成の過程は、今後一層検討することが必要である。とくに、後期（女子）青年は、いうところの男性性、女性性の枠組をのりこえた生き方——成熟した生き方が青年にとってありうるのではないか。こうした視点の探求を含めた課題と今後どのように取り組むかが重要な課題となっている。

4. 家 族

1980年代の始めから青年と家族の領域は、青年心理研究のなかで急速に発展してきた分野の1つとなっている。家族関係についての関心と考え方は、1950年代の精神分析の仕事にその発端をみることができる。青年期の家族関係は、ストレス、緊張、葛藤はさけられないとする精神分析のモデルは、以後とくにこの15年来大きく変容されてきた。1970年代から始められた経験的研究により、疾風怒濤の青年観は、和らげられてきた。両親と青年間の葛藤と分離の描写にかわり、青年期の家族との結びつきと青年——家族間の相互的影響の重要性が認識されている。親子関係は、青年期に劇的に変わるのではなく、児童期から青年期への移行は、親子関係の重要な再編成の時期とみられる。

青年期におけるノーマルで、健康な親子関係を描写する視点は、このように確かにゆれ動いている。こうした動向を支える青年と家族研究について、1) 思春期的変化、認知変化などの側面を組みこんだ研究、2) 面接、質問紙だけでなく、洗練された観察と相互作用の方略を含めた家族研究を中心にして、以下に記述する。

家族関係の変化をひきおこす刺激としての青年発達

青年期を研究する者の中には、青年期への過渡期の発達が、家族関係の変化をもたらすと考える研究者が多くなっている。これは、家族関係と人間発達の研究における重要な変化——両親の子どもへの影響から、子どもの家族への影響を重視する視点と対応する。青年期の子どもの家族への効果の研究は、前青年期の子どもと青年期の子どもの家族相互作用の型を比較した研究に始まる (Alexander 1973, Jacob 1974)。これらの研究では、歴年齢は独立変数であり、青年発達の身体的成熟、社会的関係の拡大、洗練される認知技能、自律性への要求などの代用として使用されている。ともあれ、Jacob の実験的研究では、家族関係の再編成の特殊な型が前青年期から青年中期にかけての過渡期に生ずることを示している。

思春期的変化

前青年期から青年中期にかけての家族関係の再編成と適応は、青年の年齢自体の函数というより思春期的、認知的、社会的発達の函数としてとらえることができる。思春期的発達 pubertal development は、子どもの身体的特徴の変化によってよく示される (Tanner 1962)。それらは、内分泌の変化とともに、身長、顔の様相、身体釣合、声などで容易に観察できる。子どもは成熟するにしたがって、思春期的発達のサインを示さない前思春期的状態から思春期成長の頂点へ、さらに思春期的成熟に十分に達した段階にいたる。青年期発達の家族適応に関心をもつ研究者は、思春期的成熟の外観的サインの家族関係への効果を検討する。女子の家族についての多くの研究では、思春期的状態を把握するのに初経の状態を基準としている。

Steinberg (1981) は、すでにみてきたように家族の相互作用の型は男子の思春期的発達の位相が進行するにしたがって、どのように変化するかを検討した。かれは、思春期的状態と家族相互作用のデータを6か月間隔で収集した。対象は、11歳から14歳の男子とその両親である。すべて長子であり、中流階級のサンプルである。家族相互作用の型は、Jacob の方法に準拠している。テープに収められた家族の相互作用は、中断の形式、説

明のなさ、中断に対しての屈服、家族の最終決定への影響などをインデックスにして、葛藤、力、恭順について検討される。相互作用のデータは男子の年齢函数として検討するとき、一貫した結果は得られなかったが、男子の思春期的成熟の函数として関係づけられたとき、家族の相互作用とくに母—息子関係の変容が明らかにされている。

Hill たち (1985a, b) は、Steinberg の成果は観察方法でなく自己報告でも得られるか、同じ結果が男子の家族、女子の家族でみられるかについて検討している。かれらは、長子で、前思春期から後思春期にまたがる7年生を対象に、親子関係の認知に視点をあてている。Steinberg のように、Hill et. al. (1985a) では、前思春期および後思春期にくらべ、思春期的発達の頂点で母—息子関係に動揺のあることを示している。思春期発達の頂点で、家族相互作用の型は動くという見解を支持するものである。女子についても、ほぼ同様の結果が得られている。しかし、女子では、思春期的発達がさらに進んでも、家族の決定に影響をおよぼさないことを示している。

最近の研究をみると、思春期的成熟 pubertal maturation は、親子の密接さを幾分減少させ、青年の情緒的自律性の感情を増加させることを示している (Steinberg 1987b, 1988)。また、母は成熟した青年の行動に対して抑制しなくなる傾向を示唆している (Papini & Sebbby 1987)。思春期は、親子の間に最適の距離をその頂点で保ち出し、親子関係の変容に触媒として役立っている。

青年は成熟するにしたがって、母—子関係は父—子関係以上に变化する。こうした結果は、かなり斉一性を示しているが、思春期的状態は、青年—両親関係の変容の比較的僅かな部分を説明することに心を留める必要があらう。さらに、親子関係の動揺は、多くの家族では一般的に positive な感情の文脈で生ずるのであって、分離や反目の感情のもとではないのである。

認知的変化

青年の認知的発達は、両親と家族の相互作用の型にさまざまな効果をもたらす。理由づけをする能力が発達してくると、青年は両親に対して以前とは違った合理的な議論をするようになる。また、原理的、選択的に思考する能力は、家族の状態、規律や調整について新しい視点から問題解決の方略を探るようになる。青年の社会的、認知的変化と家族関係を結びつける研究は、始まり出したところである。こうした動きの一端についてはすでに紹介してきたので、ここでは割愛するが、これらの研究

は、今後一層検討されることが期待されている。

家族関係におけるこうした変化が、逆に親の健康状態 well-being とどのように関係するかは、これらもまた、経験的に注目され始めたところである。これまでのデータをみると、親のストレスは、初期青年期の親でもっとも大きい。そして青年の自己決定の要求と関連している (Small et al. 1988)。しかし青年の発達と親の精神健康の結びつきは、親が自らの仕事の役割に対して方向づけをする特徴によって調整される (Silverberg & Steinberg 1990)。仕事への方向づけの弱い親は、子どもが過渡期であるというサインは精神健康と負の相関を示すが、仕事に対する強い方向づけは、過渡期の発達に好影響を受けている。これらの二群の親が、将来的には青年の新しい挑戦に適應する能力において異なるかどうかを検討することは、興味深い問題であろう。

青年の心理・社会的発達への家族の影響

児童の発達研究において主流となっていた傾向は、親業 parenting と家族の環境を発達の主要な文脈として検討してきたことである (Collins, 1984)。親のスタイルと家族相互作用の型が子どもの健康な発達にどのような効果をもつかを明らかにすることが、この領域の主要な課題となっている。こうした研究は、初期ならびに児童中期に視点をあてていたが (Maccoby & Martin, 1983), 若干の研究者は、最近こうした努力を青年期に拡張始めている。

結合性、独自性とかかわる諸研究

家族相互作用の型と青年の主要な発達課題の結びつき——同一性探求、自我発達、対人的視点取得技術の形成——に視点をあてた研究が、多くなされている (Cooper et al., 1983, Grotevant & Cooper, 1985, 1986; Hauser et al., 1984; Powers, Hauser, Schwartz, Noam, & Jacobson, 1983)。この研究の多くは、家族の情緒的支持と結合性の文脈における青年の独自性の奨励——不一致の見解を許容し、異なった見解の表出を認める——は、青年の心理・社会的発達に最適の環境を提供するという考えに基づいている。

Hauser と Powers たち (Hauser et al., 1984; Powers et al., 1983) は、家族の相互作用が促進的あるいは抑制的に青年の自我発達に果たす役割を特定しようと試みている。青年の発達を刺激するためには親子の相互作用は、情緒的支持 (受容, 同情, 討論の奨励) をともなった認知的促進行動 (異なった視点のコミュニケーション, 見解への挑戦, 焦点づけ, 問題解決) をすることが必要である。抑制的相互作用は、とくに情緒的

葛藤の文脈において両親はけなしたり、事実を曲げたり、回避したりすることによって、子どもの分化を妨げる。

Hauser と Powers たちの研究は、これらの仮説を支持する結果を得ている。14,5歳の子どもの両親の構造化された相互作用の研究で、青年の自我発達は、情緒的支持が多く、情緒的葛藤の少ない文脈で、非競争的な観点 (自己の意見を明確にしたり、他者の意見の明確化を要求する行動) と挑戦的行動 (他人の立場を批判したり、自分の視点をまもる行動) を示す家族の中でうまく発達している (Powers et al. 1983)。この結果は Hauser, et al. (1984) の研究と同じように、親の情緒的反応と青年の自我発達の強い結びつきを示している。

4年にわたる縦断的研究をみると (Leaper, et al. 1989), 自我発達の前進は、女子では分離を示唆する型と関連するが、男子では暖かさや支持を特徴とする家族討論と関連している。また、Hauser et al. (1987) は、青年の自我発達の段階を査定しており、自我発達の軌跡 trajectories と先行条件としての家族相互作用の型と関連づけている。自我発達が拘束された青年の両親は、もっとも促進的でなかった。対照的に、前進的な自我発達を示した青年の両親では、青年に認知的、情緒的促進をしている。多様な視点と異なった視点を許容し、奨励していた (Silverberg et al., 1992)。

これらに関連した研究をみると、(Grotevant & Cooper 1986) は、家族の二者関係における個体化の促進的役割を明らかにする青年発達のモデルを提示している。このモデルによると、個体化される関係 individuated relationship は、独自性と結合性のバランスを示している。このモデルを枠組として用い、Grotevant & Cooper は、家族のコミュニケーションの型を次の4つに査定する。独自性は、分離——自己と他者の差異をのべる——と自己主張——他者とは異なった視点をはっきり述べる——に反映され、結合性は、相互性——他者の考えに感受的で尊敬する——と滲透性——開放的であり、他者の見解に応答的である——に反映される。

高校生とその家族の観察結果によると (Grotevant & Cooper 1985), 家族関係の結びつきと分離の効果的な組合せは、青年の同一性探求と視点取得スキルと関連するという予測を若干支持するものである。同一性探求と役割取得スキルの高い青年は、一方の両親とは少なくとも個体化された関係にあることがわかる。男子の家族では、父—息子のコミュニケーションスタイルのみが、同一性探求と関連している。同一性の高い男子青年は、父に対して意見の相違を述べ、示唆的であるのに対して、父はこれらの行動に相互性を示している。同一性の高い

女子青年では、父が母に分離を示し、相互性が低く滲透性を示しているが、母は、父に意見を直接に述べるが、父との討論はする構えをもつ、という父母間のコミュニケーションと関連している。

Hauser たち、および Grotevant たちの研究は、positive な情緒的結びつきを保持しながら、青年の個体化を促進する親子関係の型は、青年の健康な自己の感覚と自律性を育てる、という考え方の基盤となるものである。

親のスタイル parenting styles に関する研究

概念的に関連する研究の流れとして、青年の心理・社会的コンピテンス、あるいは問題行動と関連する親の養育ないしスタイルがある。社会化の文献で、もっとも斉一な結果の1つは、権威ある親のスタイル an authoritative parenting style と就学前児、児童、青年の心理・社会的コンピテンスの間の好ましい関係である。権威ある parenting の概念は、Baumrind (1978) の仕事から派生しており、健康な児童発達を促進する親の働きかけのクラスターを特定するものである。彼女の成果やこの分野での他の研究に基づく、親のスタイルは権威ある、権威主義の、溺愛的、無関心の4つのスタイルに概念化することができる (Maccoby & Martin 1983)。

権威ある親 authoritative parent は、親の働きかけに効果的なバランスを示す。かれらは、暖かい親子関係を奨励し、子どもを決定に参加させ、意見と独自性を述べさせる。同時に、子どもの行動として年齢に適したルール、標準、限界を設ける。これらの親は、家族のルールに合理的な説明をし、しつけとかかわる問題などでは子どもと言語的なやりとりをする。つまり、権威ある親は、高い水準の暖かさ、要求性（行動の統制と監視）と心理的自律性を結びつけている。親のスタイルと青年発達の大規模な最近の質問紙調査によると、権威ある家庭で育てられた青年は、他の青年より自己信頼、仕事に対する positive な態度、学業成績、精神健康のインデックスで高い傾向がある (Dornbusch et al. 1987; Steinberg et al. 1989)。これらの青年は、仲間より心理的問題あるいは薬物、アルコール使用、非行や学校での不行跡などの外見の問題は少ない。権威ある parenting の学業への成功のプラスの効果は、部分的に、努力と仕事に対する態度の好ましい影響によることが指摘されている (Steinberg et al. 1989)。

親のかかわりが青年発達に因果的役割を演ずるとすれば、両親の受容と暖かさは、青年の健康な情緒的発達とプラスの自己概念に役立っている。他方、確たる行動の統制——親の監視と限界設定の適切な水準を含む——は、

青年の問題行動の発達を阻止ないし遅滞させるのに役立っている。

5. 仲間

ここ10年来、児童期の仲間関係に関する研究は、すばらしい発展をしているが、そこでの勢力的な研究が青年期に拡張し始めた、という印象をもつ。その方向性を Hill (1983) にしたがって指摘してみると、1) 青年の社会的世界についての全体的、記述的研究が増えたこと、2) 友情の研究が人気あるいは社会的受容ときり離されて、中心的な課題として注目され始めていること、3) 単一の計画内に親と仲間関係を結びつける研究がなされ初めてきたこと、4) 社会的スキルないしコンピテンスの発達を促す試みが増えていること、などである。いまから20年ばかり前のことと思うが、中等教育の大衆化と工業化の発展にともなって、仲間の青年発達への効果について、ホットな議論がなされていた。青年は成人から隔離されている。青年文化は、成人文化と異なっており、相対するものとみなされた。こうして、仲間は家族にかかわって社会化への効果をもつといわれていた。

しかし、その当時ですら、こうした思索を支持しないデータもみられていた。友人は、よく似た家族背景が基盤となっているので、親と仲間の価値に断絶があるのではないことを推測させている (Kandel, 1978)。また、親は、子どもの職業や教育的要求に重要な影響力をもっている (Spenner & Featherman 1978) ことが指摘されていた。

こうした見解の差異をなくしていくためには、結局のところ、青年の社会的世界についての記述的情報を収集することが考えられる。青年は誰とどれだけの時間、何をしてすごしているか、についての理解を深めることが必要である。

Garbarino, et. al. (1978) は、児童（小学6年生111名）の社会的ネットワークスの検討をしている。身体的発達を前青年期、過渡期、初期青年期に分けてみると、子どもが成人を重要な他者と報告するパーセントは低下しており、青年期への過渡期に直面した子どもの社会的環境の異質性を示す年齢隔離 age segregation が若干示唆されている。Montemayor & Van Komen (1980) は、高校のキャンパス内と校外環境で他者と相互作用している高校生403名を観察しているが、交際していた37%は、成人であることを報告している。この数値は、年齢隔離を主張するには高い値を示している。Blyth, Hill & Thiel (1982) は、青年の社会的世界における重要な他者 significant others の十分な資料をうるために、7年生から10年生にいたる約3000名を対象

に調査している。その結果をみると、4学年の殆どすべての青年は重要な他者として両親ときょうだいをあげている。さらに、多くの青年は、家族と非家族の成人を重要な他者としてリストする。仲間として報告される数は、たしかに増えているが、青年期中、成人の数は減少していない。観察ならびに面接の方略は、青年の社会的世界の全体的記述に適した方法といえるであろう。

Cochran & Brassard (1979) に示唆されるこの時期の援助体制の研究、もっと一般的にいった社会的ネットワークの研究は、青年のこうした情報をより豊かにすることが期待されるであろう。

ここ10年以上にわたって、社会的コンピテンスは、社会的受容、人気とならんで友情という概念で定義されている。McGuire & Weisz (1982) は、Sullivanによって予測されたように、友人をもつ子どもはもたない子どもに比べ、愛他ならびに視点取得の技能の高いことを見い出している。対照的に、人気については、それらと有意な効果を示していない。親密性を学ぶ文脈としての仲間関係は、初期青年期ではとくに注目される場所である。Reisman (1985) も、友情を社会的コンピテンスと関連させて考察している。青年期に友人を持たないか少ないことあるいは仲間関係がうまくいかないことは、心理的に困難を伴ない、社会的インコンピテンスであり、成人期でもうまく適応できないと述べている。

Tesch (1983) の友情に関するレビューによると、友情の特質は、就学前の子どもでは行動をとともにすることから、前青年期の子どもでは忠誠と相互援助をすることへ、さらに青年期では親密な情報の開示と独自の個として理解することへと、年齢とともに変化することを指摘する。

友情の発達する基盤として、Lewis & Feiring (1989) は、漸成説（愛着説）、社会的ネットワーク説、気質説などをあげている。漸成説では、親子関係は友情の発達する基盤であるとするのに対して、かれらの主張する社会的ネットワークモデルでは、子どもの社会的ネットワーク内のさまざまな人びととの経験を強調し、母子関係は主要なものではないとする。

青年期の課題としていい直すと、家族と仲間の社会的世界のつながりは、どのようなになっているかの問題である。親と仲間の世界におけるシステムの相互依存は、どのようなものであるかの問いといえる。子どもと青年では、仲間と交渉するスキルに差異がある。仲間との結びつきを開始したり、多様にしたたり、維持したり、深めたりするスキルは異なっている。Cooper & Ayers-Lopez (1985) および Cooper & Grotevant (1987) は、こうした家族と仲間関係を結びつける先駆的研究で

ある。家族内で個性化された関係（分離と相互性の特質と関係する）を経験した青年は、実際の社会的関係では価値のあるコンピテンスといえる視点取得とかかわることが指摘されている。

また、Gottman (1983) のフィールド場面における友情関係の縦断的観察も、家族関係が青年の仲間関係をいかに作りあげていくかの理解を深めるものである。このように単一の研究で、発達への1環境以上の効果を考察できる研究は、その理論的な力を増すものであり、今後一層検討されることが要請されている。

最後に、仲間関係の研究の重要性は決して低く評価すべきではない。仲間関係がうまくいかないのは、多分に社会的スキルの発達が乏しいことによるのであるが、そのことは青年期だけでなく、成人期においても、社会的・心理的病因とからみ合っている。社会的スキルの介入研究は、理論的にも実際的にも重要であり、青年の精神的健康を考察する上で重要な位置を占めている。これらの研究が数多く試みられているのはいうまでもないが、それらの動向についての紹介は割愛することにする。

6. 学 校

中等教育は、環境として青年の発達にどのような効果をもっているのか。学校が青年の発達にどのような効果をもつかは、一般に、教授—学習の条件ないしタイプが青年の行動発達とどのようにかわるかを知ることによって理解する。さらに、学校の制度ないし編成が青年の社会的関係の型に及ぼす効果を検討することである。第1の接近では、学級の活動とその成果に視点があてられる。それに対して第2の接近では、特定のグルーピング—能力別指導、6年一貫性教育などが生徒の学校内外の社会的関係に及ぼす効果に視点をあてる、ということができる。

教授—学習の条件として、教師が主体となって伝統的に一斉授業をすること、子ども中心の教授—学習過程と考えられるオープン、エデュケーションをすることなどが考えられる。さらに授業は、教師、教材および生徒の相互作用による過程といえるので、教材に中心をおく条件などがある。このうち、オープン・エデュケーションの効果の研究は、必ずしも評価が一定していない。Hoawitz 1979の研究によると、オープン・エデュケーションでは、自主性、協調性、それに続いて好奇心、学校に対する態度といった面で伝統的クラスよりも優れていると結論づける研究が多い。

学校編成が社会的関係の型に及ぼす効果の研究として、Blyth, Hill & Smyth (1981) がある。Blyth らは、学年水準の編成が生徒の行動、態度や経験に差異をもた

らすかを検討する。6-3-3制から6-2-2-2制へと学校の構造 structure が移行し変化するとき、7年生から9年生の生徒を対象として上級生の下級生への影響を調べている。上級生がいるとき、下級生の態度、行動および経験とくに学校環境の認知、活動への参加、および酒、煙草などの使用は影響されている。その効果は、9年生のいる7年生、8年生より、10年生のいる9年生で大きいことが指摘されている。

初期青年期に視点をあてる学校環境の研究

このような初期青年を対象とする学校環境の研究は、アメリカではこの10数年来活発に検討されている。その成果の一部は、Carnegie Council on Adolescent Development (1989) に反映されている。そこでは、アメリカでの青年問題の発生の多くは、初期青年期に始まるとする認識がある。1970年代後半からの Hill, J を頂点とする初期青年期研究が開花し始めたという印象である。

もともと初期青年期は、発達の時期として個人に危険をもたらす特有の時期なのかという関心がある。学校生活との関連でいえば、この時期に学業の動機づけと自己認知が下降する。Simmons, Blyth, Van Cleave & Bush (1979) は、学校の構造、思春期および初期のデートが自己尊重 self-esteem に及ぼす効果を検討している。白人女子青年が中学(6-3制)の新しい環境に移ると、7年生では男子ならびに学校(8-4制)を変わらない女子にくらべ不利である。自己尊重の低い女子青年は、学校がかわる、思春期に達した、さらにデートを始めたという多様な変化を経験することがわかる。しかし、男子では、思春期的発達の早いことは自己尊重に有利になっている。Simmons & Blyth (1987) では、中学に移行するにしたがって、初期青年の学業成績に著しい下降がみられた、という。

こうした初期青年のいわば否定的な変化は、どのように説明することができるのか。分析的な視点にたてば、この下降の現象は、初期青年の発達と関連した心的動乱 intrapsychic upheaval から生ずると考える。この視点では、動機的、行動的問題が増加する初期青年期にユニークな何かがある、ことを仮定する。またすでに報告した研究では、中学への移行のタイミングと思春期的発達の一致が示唆される。Blyth, Simmons & Carlton-Ford (1983) によると、累積的なストレス理論に基づくことが考えられる。動機などの低下は、思春期的発達と学校移行に伴う多様なストレスによる。思春期的発達は、生物学的、形態的、社会的変化と関連するので、それ自体ストレスである。また、学校移行もストレスで

ある。というのは、多くの変化を経験するのであるから。これらのストレスの源が混在して否定的動機的な結果を生ずるのではないかと推測されている。

これに対して、Eccles & Midgley (1990) は、初期青年期のユニークな過渡的性質は、部分的には、個人の発達的变化と社会的環境の構造的変化—ことに個人が過渡期に移行する学校との間の相互作用から生ずる、と主張する。かれらは、中学校という環境の特質が青年前期の否定的傾向をもたらすと考える。人—環境適合説 Person-Environment Fit theory にもとづいて、こうした下降がみられるのは、中学校が初期青年に対して発達的に適切な教育環境を準備しないからだと指摘する。人—環境適合説によると、ひとの動機づけと精神健康は、個人が社会的環境に対してもつ特徴とこれらの社会的環境の適合としてみると、よく理解できる。とくに個人の要求、動機的方向づけと社会的環境の要求ならびに特徴の適合が、動機づけと精神衛生に影響すると仮定する。

かれらは、こうした視点から、初期青年にみられる学業動機づけと自己認知の発達の下降の現象を分析する。これらの分析を通して、初期青年の発達の要求とかれらが中学に移行するとき経験する環境変化の特殊性の間の不均衡を示唆しようと試みている。

環境としての中等教育が青年の行動と発達にどのような効果をもつかという研究は、今後ますます勢力的になされることが必要である。ここで重要なことは、いわば制度的なラベル—tracking, middle-vs-junior high school—を概念化の代用として使用するのではなく、発達に対する環境としての学校の概念化と測定がもっとも緊急の課題となっている。教授—学習の条件が発達におよぼす効果の研究では、今後一層、青年の活動 activity や自律性の発達と関連する効果の研究が望まれる。また、教師—生徒関係に着目すると、中等教育における統制、訓練、権威の社会心理学的研究が必要である。さらにまた、健康教育とかかわるカリキュラムおよび教授—学習の青年の社会的発達への影響を検討することも期待されている。

7. 健康行動

日本でも健康心理学が心理学の一分野として発足してから数年が経過している。日常生活における健康の意識と健康に関連した行動の研究の必要性が認識され出したからである。そこでは、生涯発達における健康増進、保持のための運動、食行動や risk-taking などの研究が求められている。

すでにみてきたように、初期青年期は誕生後を除いて

もっとも身体的変化の著しい時期である。自己の身体について新しい視点から考える時期である。また、この時期は知的発達も著しく、具体的操作から形式的操作に移行する新しいスキルを体得する時期である。それだけに、健康についての認識は一段と深まるのではないかと考えられる。青年期は、健康教育にとってもっとも機熟したタイミングのよい時期と考えることができる。

もし、青年期が健康について考えるにふさわしい時期であるとするならば、Hill (1983) が指摘しているようにごく素朴な問いかけであるが、

- (1) 運動、食行動や risk-taking への、両親、仲間、その他の社会的、メディアの影響についての研究。
- (2) 運動、食行動や risk-taking に対して、青年がどのように理解し、解釈しているかについての、社会認知的な発達研究。
- (3) Type-A、Type-B や心臓血管にかかりやすいとする諸概念、さらにガンや事故多発傾向と関連しそうな生活スタイルの諸概念と結びつきやすい“生活スタイル”やその決定因についての全体的なパターンの研究。

などのより自然的な、日常生活の研究から出発することができるであろう。

健康行動に関する関心の背後には、当然のことながら、青年の精神健康をどのようにとらえるか、どのように考えるかといった基本的な問題がある。当初は、このセクションでは健康行動に限定する予定であったが、青年の精神的健康についてふれていく。青年心理学は、青年の精神健康の新しい定義を試み始める真只中にある、といえるのではないか。その定義は、青年の身体的、心理的そして社会的挑戦への、さまざまな適応のパターンを記述することから始まる。青年のさまざまな発達の道筋 path、強さと適応のプロフィールを知ることによって、その理解を進めることができる。

以前のもっともポピュラーな青年の精神健康についての理解は、青年は内的動揺と外的葛藤の時期、つまり疾風怒濤の青年観である。青年期についての現在の視点では、青年に何が生ずるべきかといった理論的な展開でなく、青年の適応と成長についての経験的なプロフィールに基づくものである。さらにいえば、青年の精神的健康についての単一のモデルではなく、青年の行動、態度、社会的関係、発達の道筋の多様な変異 variation が、青年の精神健康についての概念化に適切であると考えられている。青年の精神健康について、多次元的な、復眼的 pluralistic な視点から理解することが望まれている。(Power, Hauser, & Kilner 1989)

青年期における個人間差異に視点をあてることは、健

康とみられる青年の行動と発達のパターンの全貌を記述する点で有用である。(精神)健康の概念は、例えば Offer & Sabshin (1984) では、主として次の4つの仕方 で定義される。

- (1) 経験的、統計的な平均としての青年——大多数の青年——のプロフィールとして。
- (2) 理想的青年の最善の働き functioning として。
- (3) 臨床診断としての疾病ないし徴候の欠如として。
- (4) 時代と文化の変化するシステムの結果として。

精神健康について考えるとき、われわれは、これらの異なった定義の1つにのみ寄りかかる必要はない。それぞれの定義には、そのよさがある。例えば、統計的に平均的なタイプの青年は、青年が疾風怒濤の現象を示すか否かの判断をするときには、重要な視点である。最善の発達と適応的働きの理想とみる視点は、positive な成長と健康増進の行動に寄与する要因を知るのに適している。また、臨床診断の欠如態としての精神健康は、個人差研究には適した方法である。データは定義にしたがって分析され、解釈されるのであるから、ひとが使用する精神健康の定義を明確にすることが必要である。とはいえ、個人差の研究に資する定義のあることも、また事実といえる。

まとめにかえて

紙幅もさることながら、まとめをする時間的余裕がなくなってきた。原稿を記しながら、印象的であった1・2の視点をまとめにかえて述べておく。

生物的、心理的および社会的諸領域の相互作用の研究

青年期の研究は、青年発達、適応、精神健康を理解するのに多変量的、系統的接近をし始めてきた (Hill, 1987, Petersen, 1988)。青年の心理・社会的発達とその形成の過程が、生物的、心理的および社会的変数により統合されている。心理的発達とこれらの要因の相互作用の効果の分析は、とくに重要である。この時期では、これらの領域で重要な、そして急激な変化が生じているからである。社会学者の Simmons や Blyth たちの研究はその一例である。かれらは、社会的変数 (学校の構造など) と生物学的変数 (思春期発達の割合) の自己尊重への影響を検討している。これらの次元ないし領域を含めることによって、社会的制度、社会的役割と青年の思春期的成長の軌跡の相互作用を明らかにしている (Simmons, Blyth, Van Cleave & Bush 1979, Blyth, Simmons & Carton-Ford 1983 などの一連の研究)。

Petersen たちの势力的な研究にも、こうした動きの一端が反映されている (Peterson & Crockett 1985)。また、青年期の生物的、心理的および文化的特徴の相互作用の研究は、文化人類学者たちによって1980年代に始められている。

この接近では、取り扱う変数が多くなるにしたがって心理学者と他の領域——社会学、生物学、医学、精神医学、文化人類学の青年研究者との共同研究が必要である。青年の精神健康と発達の社会的文脈に視点をあてた研究は、今後一層必要である。青年の精神健康の経験的研究の多くは、青年の発達と適応の過程に影響する文脈の変数の重要性を認識している。それだけに、これらの研究では、文脈の変数は統計的に統制されている。多くの研究では、同質的な標本に基づくことになる。さまざまな背景の青年の発達と適応のパターンの研究が、多様な青年の生活の文脈で研究されなければならない。

青年の精神健康の発達の特徵

青年心理の研究は、基本的に変化の研究である。青年の変化あるいは発達は、一般に、研究者の関心をもつ変数により、能力と行動の質的体制化の系列（例えば Hauser たちにみられるような自我発達の段階）または量的変化の一連の系列（例えば Hill たちにみられるような家族内で再交渉する力がつくられていく過程）として概念化される。発達過程の概念化のこうした差異にかかわらず、青年心理の研究では、時間的分析 temporal analysis の重要性についての認識が深まっている。この時間的分析は、青年発達の2つの局面にむけられているように思われる。1つは、青年の特定の時点における個人の発達の状態 status ないし水準 level であり、基本的な側面である。青年の自我発達の水準（心理的変数）と身体的・思春期的成熟の水準は、発達の指標であり、経験的に適応の機能と情緒的健康と関連づけられている (Noam, et al 1984)。他の1つは、仲間との比較における発達のタイミング timing である。発達のタイミングは、特定の青年が特定の領域の発達において適切であるか否か（早すぎるか遅すぎるか）である。思春期的発達のタイミングが、青年の自己像 self-image に効果をもつとする指摘もなされている。思春期的発達のタイミングは、個人だけでなく、国によっても異なっている。

このようにみえてくると、青年の精神健康と発達研究は、単一の青年像を描写するのではなく、発達の軌跡における青年の特定時点を記述することが必要である。この発達の時点は、年齢だけ（初期、中期、後期）に着目するのではなく、多様な変数、つまり生物的、心理的変

数、さらに社会的変数と関連する、各青年の発達の水準とタイミングにより正確に記述することが求められる。こうした青年研究の作業では、縦断的データが要請されている。

文 献

- Alexander, J. F. 1973 Defensive and supportive communications in family systems. *Journal of Marriage and the Family*, 35, 613-617.
- Baumrind, D. 1978 Parental disciplinary patterns and social competence in children. *Youth and Society*, 9, 239-276.
- Blyth, D. A., Hill, J. P. & Smyth, C. K. 1981 The influence of older adolescents on younger adolescents: Do grade-level arrangements make a difference in behaviors, attitudes, and experiences? *Journal of Early Adolescence*, Vol. 1, No. 1, 85-110.
- Blyth, D. A., Hill, J. P. & Thiel, K. S. 1982 Early adolescents' significant others: Grade and gender differences in perceived relationships with familial and nonfamilial adults and young people. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 11, No. 6, 425-450.
- Blyth, D., Simmons, R., & Carlton-Ford, S. 1983 The adjustment of early adolescents to school transitions. *Journal of Early Adolescence*, 3, 105-120.
- Carnegie Council on Adolescent Development 1989 *Turning points: Preparing American youth for the 21st century*. Carnegie corporation of New York.
- Cochran, M. & Brassard, J. A. 1979 Child development and personal social networks. *Child Development*, 50, 601-616.
- Collins, W. A. 1984 Commentary: Interaction and child development. In M. Perlmutter (Ed.), *Parent child interaction and parent-child relations in child development: The Minnesota Symposium on Child Psychology Vol. 17*, pp. 167-175 Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Cooper, C. R., Grotevant, H. D. & Condon, S. M. 1983 Individuality and connectedness in the family as a context for adolescent identity

- formation and role-taking skill. In, H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.) *Adolescent development in the family: New directions for child development*. 43-59 San Francisco Jossey-Bass
- Cooper, C. R., & Ayers-Lopez, S. 1985 Family and peer systems in early adolescence: New models of the role of relationships in development. *Journal of Early Adolescence*, 5, 9-21.
- Cooper, C. R., & Grotevant, H. D. 1987 Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 247-264.
- Damon, W., & Hart, D. 1982 The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child Development*, 53, 841-864.
- Dornbusch, S., Carlsmith, J., Bushwall, S., Ritter, P., Leiderman, P., Hastorf, A., & Gross, R. 1985 Single parents, extended households, and the control of adolescents. *Child Development*, 56, 326-341.
- Dornbusch, S., Ritter, P., Leiderman, P., Roberts, D., & Fraleigh, M. 1987 The relation of parenting style to adolescent school performance. *Child Development*, 58, 1244-1257.
- Douvan, E., & Adelson, J. 1966 *The adolescent experience*. New York: Wiley.
- Eccles, J. S. & Midgley, C. 1990 Changes in academic motivation and self-perception during early adolescence. In R. Montemayor, G. R. Adams & T. P. Gullotta (Eds.) *From childhood to adolescence. A Transitional periods?* 134-155 Sage Publications
- Freud, A. 1968 Adolescence. In A. E. Winder, & D. L. Angus (Eds.), *Adolescence contemporary studies*. Van Northrand Reinhold Company.
- Garbarino, J., Burston, N., Raber, S., Russell, R. & Crouter, A. 1978 The social maps of children approaching adolescence: Studing the ecology of youth development. *Journal of Youth & Adolescence*, Vol. 7, No. 4, 417-428.
- Gottman, J. M. 1983 How children become friends. *Monographs of the society for research in child development*. Serial No. 201. Vol. 48. No. 3.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. 1985 Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development*, 56, 415-428.
- Grotevant, H. D. & Cooper, C. R. 1986 Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, 29, 82-100.
- Grotevant, H. D. & Thorbecke, W. L. 1982b Sex differences in styles of occupational identity formation in late adolescence. *Developmental Psychology*, 18, 396-405.
- Grotevant, H. D., Thorbecke, W. & Meyer, M. L. 1982a An extension of marcia's identity status interview into the interpersonal domain. *Journal of Youth & Adolescence*, Vol. 11, No. 1, 33-47.
- ホール G.S. 元良勇次郎・中島力造・速水滉・青木宗太郎 (訳) 1910 青年期の研究 同文館 (Hall, G. S. 1904 *Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion, and education*. New York: Appleton.
- Hauser, S. T., Powers, S. I., Noam, G., Jacobson, A. M., Weiss, B., & Follansbee, D. J. 1984 Familial contexts of adolescent ego development. *Child Development*, 55, 195-213.
- Hill, J. P. 1983 Early adolescence: A research agenda. *Journal of Early Adolescence*, 3, 1-21.
- Hill, J. P. 1987 Research on adolescents and their families: Past and prospect. In C. E. Irwin, Jr. (Ed.), *Adolescent social behavior and health. New directions for child development*, No. 37. San Francisco: Jossey-Bass.
- Hill, J. P., Holmbeck, G. N., Marlow, L., Green, T. M., & Lynch, M. E. 1985a Menarcheal status and parent-child relations in families of seventh-grade girls. *Journal of Youth and Adolescence*, 14, 301-316.
- Hill, J. P., Holmbeck, G. N., Marlow, L., Green, T. M., & Lynch, M. E. 1985b Pubertal status and parent-child relations in families of seventh-grade boys. *Journal of Early Adolescence*, 5, 31-44.

- Huston, A. C. & Alvarez, M. M. 1990 The socialization context of gender role development in early adolescence. In R. Montemayor, G. R. Adams & T. P. Gullotta (Eds.) *From childhood to adolescence. A transitional period?* 156-179.
- Horwitz, R. A. 1979 Psychological effects of the "open classroom". *Review of Educational Research*, 49, 71-86.
- Jacob, T. 1974 Patterns of family conflict and dominance as a function of child age and social class. *Developmental Psychology*, 10, 1-12.
- Kandel, D. B. 1978 Homophily, selection, and socialization in adolescent friendships. *American Journal of Sociology*, 84, 427-436.
- Leaper, C., Hauser, S. T., Kremen, A., Powers, S. I., Jacobson, A. M., Noam, G. C., Weiss-Perry, G., & Follansbee, D. 1989 Adolescent-parent interactions in relation to adolescents' gender and ego development pathway: A longitudinal study. *Journal of Early Adolescence*, 9, 335-361.
- Lerner, R. M. 1985 Adolescent maturational changes and psychosocial development: A dynamic interactional perspective. *Journal of Youth & Adolescence*, Vol. 14, No. 4, 355-372.
- Lewis, M. & Feiring, C. 1989 Early predictors of childhood friendship. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.) *Peer relationships in child development*. Wiley pp. 246-273.
- Lynch, M. E. 1991 Gender intensification. In R. M. Lerner, A. C. Peterson & J. Brooks-Gunn (Eds.) *Encyclopedia of Adolescence*. Vol. 1 New York: Garland Publishing. pp. 389-391.
- Maccoby, E., & Martin, J. 1983 Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4, Socialization, personality, and social development* pp. 1-101 New York: Wiley.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- McGuire, K. D. & Weisz, J. R. 1982 Social cognition and behavior correlates of preadolescent chumship. *Child Development*, 53, 1478-1484.
- Montemayor, R. & Van Komen, R. 1980 Age segregation of adolescents in and out of school. *Journal of Youth & Adolescence*, Vol. 9, No. 5, 371-381.
- Noam, G. G., Hauser, S. T., Santostefano, S., Garrison, W., Jacobson, A. M., Powers, S. I., & Mead, M. 1984 Ego development and psychopathology: A study of hospitalized adolescents. *Child Development*, 55, 184-194.
- Offer, D., & Sabshin, M. 1984 *Normality and the life cycle*. New York: Basic Books.
- Papini, D. R., & Sebbly, R. 1987 Adolescent pubertal status and affective family relationships: A multivariate assessment. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 1-15.
- Petersen, A. C. 1987 The nature of biological-psychosocial interaction: The sample case of early adolescence. In R. M. Lerner & T. T. Foch (Eds.), *Biological-psychological interactions in early adolescence*. Erlbaum. pp. 35-61.
- Petersen, A. C. 1988 Adolescent development. *Annual Review of Psychology*, 39, 583-607.
- Petersen, A. C. & Crockett, L. 1985 Pubertal timing and grade effects on adjustment. *Journal of Youth and Adolescence*. Vol. 14, No. 3, 191-206.
- Petersen, A. C. & Taylor, B. 1980 The biological approach to adolescence: Biological change and psychosocial adaption. In J. Adelson (Ed.) *Handbook of the psychology of adolescence*. New York: Wiley pp. 117-155.
- Powers, S. I., Hauser, S. T., & Kilner, L. 1989 Adolescent mental health. *American Psychologist*, 44, 200-208.
- Powers, S. I., Hauser, S. T., Schwartz, J. M., Noam, G. C., & Jacobson, A. M. 1983 Adolescent ego development and family interaction: A structural-development perspective. In H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family: New directions for child development* pp. 5-24. San Francisco: Jossey-Bass.
- Reisman, J. M. 1985 Friendship and its implications for mental health or social competence.

- Journal of Early Adolescents, Vol. 5, No. 3, 383-391.
- Selman, R. L. 1976 Toward a structural analysis of developing interpersonal relations concepts: Research with normal and disturbed preadolescent boys. In A. D. Pick (Ed.) Minnesota symposia on child psychology, Vol. 10 University of Minnesota Press. pp. 156-200.
- Selman, R. L., Shorin, M. Z., Stone, C., & Phelps, E. 1983 A naturalistic study of children's social understanding. *Developmental Psychology*, 19, 82-102.
- Selman, R. L., & Demorest, A. P. 1984 Observing trouble children's interpersonal negotiation strategies: Implications of and for a developmental model. *Child Development*, 55, 288-304.
- Silverberg, S. B., & Steinberg, L. D. 1987 Adolescent autonomy, parent-adolescent conflict, and parental well-being. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 293-312.
- Silverberg, S. B., & Steinberg, L. D. 1990 Psychological well-being of parents with early adolescent children. *Developmental Psychology*, 26, 658-666.
- Silverberg, S. B., Tennenbaum, D. L. & Jacob, T. 1992 Adolescence and family interaction. In V. B. Van Hasselt & M. Hersen (Eds.) *Handbook of social development: A lifespan perspective*. Plenum Press, New York, 347-370.
- Simmons, R. G., & Blyth, D. A. 1987 Moving into adolescence: The impact of pubertal change and school context. New York: Aldine.
- Simmons, R. G., Blyth, D. A., Van Cleave, E. F. & Bush, D. M. 1979 Entry into early adolescence: The impact of school structure, puberty, and early dating on self-esteem. *American Sociological Review*, 44, 948-967.
- Small, S. A., Eastman, G. & Cornelius, S. 1988 Adolescent autonomy and parental stress. *Journal of Youth and Adolescence*, 17, 377-391.
- Smetana, J. G. 1988a Concepts of self and social conventions: Adolescents' and parents' reasoning about hypothetical and actual family conflicts. In M. R. Gunnar & W. A. Collins (Eds.), 21st Minnesota Symposium on Child Psychology pp. 79-122. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Smetana, J. G. 1988b Adolescents' and parents' conceptions of parental authority. *Child Development*, 59, 321-335.
- Smetana, J. G. 1989 Adolescents' and parents' reasoning about actual family conflict. *Child Development*, 60, 1052-1067.
- Spencer, K. L. & Featherman, D. L. 1978 Achievement ambitions. *Annual Review of Sociology*, 4, 373-420.
- Steinberg, L. D. 1981 Transformation in family relations at puberty. *Developmental Psychology*, 17, 833-840.
- Steinberg, L. 1987 Impact of puberty on family relations: Effects of pubertal status and pubertal timing. *Developmental Psychology*, 23, 451-460.
- Steinberg, L. 1988 Reciprocal relation between parent-child distance and pubertal maturation. *Developmental Psychology*, 24, 122-128.
- Steinberg, L., Elmen, J., & Mounts, N. 1989 Authoritative parenting, psychosocial maturity, and academic success among adolescents. *Child Development*, 60, 1424-1436.
- Steinberg, L. D., & Hill, J. P. 1978 Patterns of family interaction as a function of age, the onset of puberty, and formal thinking. *Developmental Psychology*, 14, 683-684.
- Thorbecke, W. & Gortevant, H. D. 1982c Gender differences in adolescent interpersonal identity formation. *Journal of Youth & Adolescence*, Vol. 11, No. 6, 479-492.
- Werrback, G. B., Gortevant, H. D. & Cooper, C. R. 1992 Patterns of family interaction and adolescent sex role concepts. *Journal of Youth & Adolescence*, Vol. 21, No. 5, 609-623.

(1993年9月7日 受稿)